

**2024 Eye's
新潟ここだけ物語**

想い | つくる | 伝える

加茂市

[F u u d]
2024
秋号
—季刊—

加茂の歴史と遊ぶ

がんばろう ● ニッポン!

Take Free
ご自由にお持ちください

JR加茂駅前から続くアーケード街<長生きストリート>のひとつ、加茂新町雁木通り商店街。雪国特有の雁木造りを加茂杉をふんだんに使用し、伝統的な風情を再現している。この加茂川と並走するストリートは江戸時代に宿場町として整備された町割りを原型とし、当時の道筋とほぼ変わらない。



① 今回の取材テーマ

加茂紙の復活

カメラマンの
ふうど

取材メモ

15



不安があったという。昔を知る年配者に、作った紙を見もらったり、他の産地を見学したりして、かつての加茂紙の姿を追い続けている。

昔、加茂紙の中心的な産地だった加茂市七谷(ななたに)地区。ここにある冬鳥越(ふゆどりごえ)スキー場の周囲で、原料のコウゾとトロロアオイが栽培されている。先日、鶴巻さんの案内で足を運んだ。ゲレンデの周囲に植えられたコウゾが2メートルほどの高さに幹を伸

ばしていた。ここで栽培される原料だけでは年間の製造量は賄えず、他の産地のコウゾも使わなければならないが、七谷産原料を使った紙は上級の扱いで販売される。コウゾは11月に根元から伐採、作業はなんと七谷中学校の生徒が行っているという。作業を体験した子どもたちの中から、鶴巻さんの後継者が生まれ、再び和紙の産地として輝く日を期待したい。

写真、文章／スタジオF(t) 渡部 佳則

①紙を漉く鶴巻由加里さん。
②七谷産コウゾを使った加茂紙。
③スキー場の周囲で育つコウゾ。



ふうど 2024秋号 vol.66

企画編集 ふうど編集室
発行人 高橋 佑
取材編集 渋川綾子
佐々木聰
写真 渡部佳則
デザイン 斎藤道司
題字 小林 翠

編集後記

加茂市の奥深い魅力のひとつに、水の音がある。とくに夜がいい。民家の明かりと街灯の僅かな光に包まれた街路で、どこからともなく水の流れる音が響いてくる。なかでも青海神社から若宮町付近に至る加茂山の麓をめぐる小径は、あたりの物寂びた佇まいと可愛らしいせせらぎが融けあい、心の凝りが自然と解けてくる。こんな密やかな水音に、デジタル世界の革命児、かの有名なApple社の共同創業者スティーブ・ジョブズも耳を傾けたかもしれない。昭和61年、ジョブズは加茂市を訪れ心の師と仰ぐ禅僧、乙川弘文が養子に入った市内の耕泰寺で坐禅を組んでいる。その頃のジョブズは業績不振に陥ったApple社の内紛で社を追われた直後にあたり、師とともに来日し、師の故郷でもある加茂で傷心を癒した。このジョブズが心を研いた耕泰寺と禅師が生まれ育った定光寺は加茂川の両岸にあり、いまも古刹の威風を湛え道行く人の目をとめている。(渋川)

発行所

株式会社 タカヨシ **ふうど** 編集室

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■上越営業所 / 〒943-0805 新潟市上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階2 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 520-7049
■東北営業部 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目3-47 上杉オオハラビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712
■東海・関西営業部 / 〒464-0025 愛知県名古屋市千種区桜が丘25番地 第8オオタビル7階 TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト / <https://www.takayoshi.co.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、NST、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みなど工房、朱鷺メッセ、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市立中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ビアBandai、ホテルタイラヤ軒、ホテル日航新潟、りゅーひーびあ新潟市民芸術文化会館 <東区>新潟空港、桑名病院、パティスリークフェオルレアン <西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟莊 <南区>新潟市農業活性化研究センター <北区>新潟せんべい王国、ピューロ福島潟、濁川公民館 <江南区>介護老人保健施設鳩田園、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館 <西蒲区>カーネギー、ドーマース・ショオ <秋葉区>カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館

【新潟市】加治川地区公民館、兼雲寺地区公民館、新発田市生涯学習センター、新発田市文化会館、新発田市立図書館、豊浦地区公民館、ホテル華鳳、【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん
【村上市】ヨボヤ会館、村上市觀光協会、【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡市立中央図書館、やまと復興交流館おたらる 【燕市】分水ビジターサービスセンター 【加茂市】椿の家
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里、【十日町市】十日町市觀光協会、十日町市博物館 【南魚沼市】櫻苑
【上越市】上越觀光コンベンション協会、上越市立族博物館みがたり、上越市立高田図書館、上越市役所、上越あるるん村
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館
【東京都】中央区プリジニがた <千代田区>新潟市東京事務所
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バインダー

この印刷物は環境にやさしい
米ぬか油を使用したライスインキで
印刷しています。

わたべ

悠久の時が磨いた街

それぞれの地域には、風土と歴史から生まれた、固有の佇まいがある。

県の中央部、三方を新津丘陵の山々に抱かれる加茂市が、いい例である。

北越の小京都と謳われ、時代の喧騒を遮断したかのように映る、

豊かでたおやかな佇まいは、懐かしく、現代人の心を和ませる。

その佇まいの足元に、どんな物語が隠されているだろうか。

想い 神に選ばれた地

れこんだ気になる。
なぜ、見るからに樹齢が不揃い
の杉木立なのか。

加茂は、宝物の宝庫である。JR
加茂駅のすぐ近く、青海神社の境
内にある加茂山公園には、加茂の
歴史がぎっしり詰まっている。な
かでも池の端から登る沢沿いの道
は薄暗く、謎めいて、つい奥へ奥へ
と引き込まれる。幹回りがひと抱
えほどの杉が多いなかで、ふいに
山肌を崩さんばかりに根を張る巨
木が現れる。そんな驚きの光景が
次々に眼前を塞ぎ、深山幽谷に紛

時は、一六〇〇年（慶長五）、関ヶ
原の戦いが起きた年。徳川家康は、
反抗的な上杉景勝を討伐する会津
攻めをした。この時、越後では徳川
側についた堀氏・村上氏・溝口氏
と、会津から侵攻してきた上杉軍
との激しい戦いが各地で繰り広げ
られた。後に「越後一揆」と呼ばれ、
上杉軍に占拠され、一時は五千人
もの一揆勢が集まり、約一ヶ月に
およぶ籠城で加茂町はさまざまに

現在、加茂山公園を覆う杉木立
の大半は、新発田藩加茂組の大庄
屋、浅野三郎右衛門が植林したもの
の一六五六年（明暦二）から三十
四年間、親子二代にわたり、種か
ら育てて植えた杉である。その数
八千本あまり。浅野三郎右衛門が
植林事業の詳細を記録し、後世に
伝えている。こうして浅野父子が
植林した杉は治山治水の役割を
担いながら、悠に三百年を超えて、
いまも神社の神域をひっそり
守っている。

平安遷都が行われた七九四年
(延暦十三)。それまで鬱蒼とした
原始林に埋めつくされた造営
地は、木々が次々に伐採され開発
された。その造営地に山城国で古
くから崇敬を集めていた賀茂神社
の神域も含まれていた。桓武天皇
は、神域を開発する代わりに、全国
六十六カ所に替地をもとめ、そこ
に神社を分霊して遷すことにつ
いた。その一つに加茂が選ばれ、青海
神社の境内に祀られたのである。

以来、加茂市域にあつた荘園は、
中林さんによれば、加茂市民は祭
り好きで、なかでも花火に目がな
いそうだ。なんと一年に五回、加茂
の夜空を花火が彩るという。



青海神社の石段。その奥に拝殿の屋根が見える(右頁上)。加茂山公園
の北側に鎮座する稻荷社の境内(右頁下)。加茂山の山頂付近で、ひと
きわ大きな天然杉。「翁(ジジ)杉」と呼ばれて古くから神木として信仰を
を集めている。(左頁)

京都との関係性を深め、神が所領する地として以前にも増し独立性が保たれた。そして台頭する武士勢力を退け、戦国時代まで神領として特異な環境下で数百年間を過ごしてきた。この長い間に、土着の文化と京風文化が混じり合い、加茂特有の個性を形づくる基層になった。数百年という時の流れには十分すぎる時間だった。

なぜ加茂が替地に選ばれたのか。加茂市教育委員会の平野黎さんに教えてもらいう。

「加茂は四神相応という平安京と似た特徴をもつ土地で、北越の小京都とも呼ばれます。もしかしたらそれが理由だったのかもしません」。そして、もうひとつの方に選定

理由に水運をあげる。「栗ヶ岳を源に市域を貫流する加茂川は、域内で信濃川と合流しています。信濃川を下って日本海に出られるため、利便性も高かったでしょう」。なるほど加茂は地政学的に優れた自然条件を備えていたのだ。

風景をアップデート

地元の人に加茂山公園の魅力を聞いてみた。

「駅の近くで、こんなに豊かな自然があり、日々の移ろいを感じる環境は、他の街にないです。とにかく紅葉に染まる谷間の景観は、素晴らしいです」と公園内にある茶屋風カフェ「椿の家」の中林園子さんは、情熱を込めて話す。中林



昨秋、公園内の池の端で初めて行ったライトアップ。



会場に加茂市ならではの個性を添えた雪椿のペーパーフラワー



加茂市のいろんな魅力を教えてくれた中林園子さん。

平安遷都との関わり



奈良時代、加茂地域を開発した部族青海首が創建した青海神社の本殿には、青海神社とともに京

都の賀茂別雷神社〈下鴨神社〉の三社が横並びに合殿する形で祀られている。

この京都の二社は、葵祭で有名な京都最古の神社で、源氏物語にも光源氏の想い女、六条御息所が葵祭を見物する際、牛車の場所取

りに負け、悔しい思いをした場面が登場する。なぜ都から遠く離れた加茂に、格式のある神社が分霊されたのか。

平安遷都が行われた七九四年(延暦十三)。それまで鬱蒼とした原始林に埋めつくされた造営地は、木々が次々に伐採され開発された。その造営地に山城国で古くから崇敬を集めていた賀茂神社の神域も含まれていた。桓武天皇は、神域を開発する代わりに、全国六十六カ所に替地をもとめ、そこに神社を分霊して遷すことについた。その一つに加茂が選ばれ、青海神社の境内に祀られたのである。

以来、加茂市域にあつた荘園は、

中林さんによれば、加茂市民は祭り好きで、なかでも花火に目がないそうだ。なんと一年に五回、加茂の夜空を花火が彩るという。

平安遷都が行われた七九四年(延暦十三)。それまで鬱蒼とした原始林に埋めつくされた造営地は、木々が次々に伐採され開発された。その一つに加茂が選ばれ、青海神社の境内に祀られたのである。

以来、加茂市域にあつた荘園は、

千年町の知恵を探す

さらに奥に進むと温泉施設があ

り、そこを通り過ぎると、行き交う車も無くなつた。もう人里から完

つくる サステナブルの結晶

平場から奥地へ

加茂市は、地形的にも奥が深い。

市域は新潟市南区と接する信濃

川中流域の沖積地から、加茂川が形成した河岸段丘の上を高さを増して延び、日本三百名山に数えら

れる標高一二九三メートルの栗ヶ岳の山中で尽きる。その七割を山地が占め、域内の標高差は約四百メートルと大きく、それぞれの地形により、風景も生業もさまざまで、バラエティに富んでいる。

では平野から奥地へ、加茂川沿いの道を歴史ドライブをしてみよう。信濃川左岸の工場地帯から、右岸の桃やルレクチエなどの果樹園が広がる地域を過ぎる。そして江戸期に新田開発された広大な水田地帯を眺め、高い跨線橋を渡りきった所で橋を潜ると、加茂川の両岸に古寺や家々がひしめく旧市街に至る。奈良時代から戦国末期まで青海神社の鳥居前町としてついで、江戸時代は宿場町・市場町として栄えた地区である。このあたりは弥彦山と同じ緯度にあり、標高三十メー

トルほどになつてゐる。市街地を過ぎ山手に向かうと、両岸の風景は大きく開け、対岸には川の護岸を護るよう長瀬神社の巨大な欅が、広大な風景の一画を占めてい。長瀬神社も創建時期が古く、加茂市を語るには欠かせない大きな神社である。

が、広大な風景の一画を占めてい。長瀬神社も創建時期が古く、加茂市を語るには欠かせない大きな神社である。

が、広大な風景の一画を占めてい。長瀬神社も創建時期が古く、加茂市を語るには欠かせない大きな神社である。

そこからの山間地は谷が開け、明るく穏やかな山里の風景のなかに、豊かさを湛える家々が棟を寄せる。この一帯が七谷という地区で、江戸時代に村松藩の財政を支えた加茂紙の大産地だった。そして加茂川に流れこむ小さな川に沿って奥に進むと、立派な屋敷が密集する集落があり、集落の外れに稻を天日乾燥する稻架木が設えられ、収穫の時を待つていた。長閑な風景は水音と蝉時雨に包まれ、道端には小さな祠が立ち、その中に地蔵様が新しいお供え物を前に佇んでいた。日本人が忘れてしまった心が、時代にまみれることなく、あたりまえに、そこにあった。

山街地を抜け、しばらく走ると風景ががらりと変わる。川の蛇行が激しくなりはじめ、両岸に山が迫り、人里が途切れ深山の気配を帯びる。このあたりが江戸時代の新發田藩と村松藩の境だったのだろ。風景が歴史を物語ついている。ここに知る人ぞ知るグルメスポット、山の湧き水を使つたところを食べさせてくれる善作茶屋がある。その背、山間部と町場の間を行き来した人たちが、旅の疲れをとつた峠の茶屋である。ちなみに江戸時代の加茂市は、新發田藩と村松藩が支配する領地だった。

市街地を抜け、しばらく走ると風景ががらりと変わる。川の蛇行が激しくなりはじめ、両岸に山が迫り、人里が途切れ深山の気配を帯びる。このあたりが江戸時代の新發田藩と村松藩の境だったのだろ。風景が歴史を物語ついている。ここに知る人ぞ知るグルメスポット、山の湧き水を使つたところを食べさせてくれる善作茶屋がある。その背、山間部と町場の間を行き来した人たちが、旅の疲れをとつた峠の茶屋である。ちなみに江戸時代の加茂市は、新發田藩と村松藩が支配する領地だった。

流域がひとつ総合商社

当然ながら地形が違えば生業が違うことが、現地を走りよく分かった。山に囲まれた加茂市は、自然素材を加工する手工業が主流だった時代では、豊かな山の資源に恵まれていた。そして市域を貫流する加茂川が製品の原料供給や、商品の輸送に重要な役割を担つたことも理解できた。上流で産出された産物が、中流の町で加工され、または商品としての付加価値を添えられて、下流まで運ばれ、さらに信濃川を下り海を伝つて全国に広がつていった。まさに加茂川流域が、生産ラインと物流機能をもつ総合商社的な性格を帶びていたのかもしれない。

流域がひとつ総合商社

自然素材といえど、江戸中期、

栗ヶ岳の山中で、多くの鉛山が発見され、村松藩の財政を潤した時期がある。鉛は金銀の精錬に必要な鉛石で、佐渡金山でも加茂産の鉛が使われていた。それを証明する御用旗が、加茂市民俗資料館に展示されている。佐渡奉行所から依頼を受けた鉛商人が、鉛を上納する時に、その旗を用いるよう通達されていた。

発見当初の鉛山は藩営だったが、後に民間の請負制で移行して運営され、上納された鉛は藩用で使う以外は、民間に払い下げられた。それを加茂町の鉛商人が買い、佐渡奉行所に納めたのだろう。もちろん鉛は加茂川と信濃川の舟運を利用して、海を渡つて佐渡に運ばれた。鉛山の坑道跡は、いまも栗ヶ岳の山中に点在しているが、藪に埋もれ、素人が近づける状態ではな

いそうだ。

ジブリの森的な資料館

御用旗を見に、加茂山の一画にある加茂市民俗資料館に行く。外観からして懐かしい佇まいでの、取材当初から気になつていて。昭和十五年に市立図書館として建てられたものを、現在の場所に移築し十年ほどで、戦中から市民の知識の広場として存在し続けている。築八



民俗資料館の2階展示室では、日本一の生産量を誇る桐たんすのほか、職人の技を見せる建具とそれらを加工する道具類が見られる。



水源地周辺の縄文遺跡で発見された縄文土器。



戊辰戦争で敗れた会津藩の武士が手内職として作り始めたという起源をもつ、おが肩を固めて彩色した松原人形。



玄関に入るや、記憶にある昭和の匂いに包まれ、心が解れる。案内をしてくれた人も当たりが柔らかく、不躊躇な質問にも丁寧に対応してくれ、昭和の情が滲み出ている。頑丈な造りの階段を上がり、下に鉛が置かれていた。ガラスケースに入れてない点が、素朴でいい。三つに分けたエリアに、桐たんすや建具・組子細工、商家の店先、農家の居間が実物展示され、加茂市の産業構成が見てとれる。ほんとに加茂紙、木綿織物の加茂縞、陣ヶ峰瓦、筆、絵幟、燭、薬など加茂の伝統産業の層の厚さに目を奪われた。やはり千年以上も歩み続けている町だ。夥しい展示物から、加茂人の手業の確かさと、時代の流れに敏感な商人気質を見た。



昭和の面影を残す加茂山公園に隣接する加茂市民俗資料館



山間部の七谷地区で見かけた美しい日本の原風景

歴史を残すことは、未来への投資

伝える

日本史のタイムカプセル

加茂大水害の記憶

加茂市を流れる信濃川と加茂川は、千年をゆうに超す町の発展を支えてきたかけがえのないインフラだった。その一方で新たな時代を運んでくる道でもあった。文化人も情報も、すべてが船に揺られてやってきた。

古代では建設ラッシュに沸く京都の地から、上賀茂神社と下鴨神社の分霊が御座船に祀られ、日本海の荒波を乗り越え新潟湊に到着し、信濃川を上り加茂川を伝つて到來した。都からはるばる民を護りに来た神々に、心から平伏しただろう。

中世には、加茂の青海神社の御神幸が、十隻以上の船をともない雅楽を奏でながら、信濃川を下り新潟の蒲原神社に至った。神を迎える地では厳かな祭儀を整え、上流から響いてくる華やかな音を、どれほど待ち焦がれたことか。

江戸・明治期なら加茂町の文化人と交流のある各分野の著名人が船で訪れ、加茂の名所や風物を楽しみながら、互いに刺激しあつたに違いない。

そんな文化面でも重要な加茂川敷に、少しでも役に立てればと思いません」と言い、この事業は未来へ

かなどを知ることで、誇りを持つことができます。そこに自分の思い出や思い入れが加わることで、故郷に対する愛着が深まります。

確かに都会の方が刺激的ですが、自分の思い出がある町に住みたいと思つてもらいたいです。そのため、少しでも役に立てればと思いません」と言い、この事業は未来への人気が読むことを想定し、わかりやすい言葉使いや図表を加えるなど工夫しているそうだ。最後に個人的な思いとして「歴史は人類の宝です。それを使った町おこしができたら嬉しい」と抱負を語った。平野さんに電話で取材を申し込んだ時、即座に「加茂市に注目していただき、ありがとうございます」と返してきた。その言葉が、今も印象に残る。加茂市のたおやかな仔まいと、どこか通底する一言でもあつた。

加茂市は、古代からの日本史が



越後加茂川夏祭りの花火大会のフィナーレを飾るナイヤガラ花火。上流から下流へ、川の中心部を花火の滝がいくつの橋の下を潜って流れる様子は圧巻(上)。加茂川を横断して泳ぐ鯉のぼりの群れ。毎年4月上旬から5月上旬まで飾られる(下)。



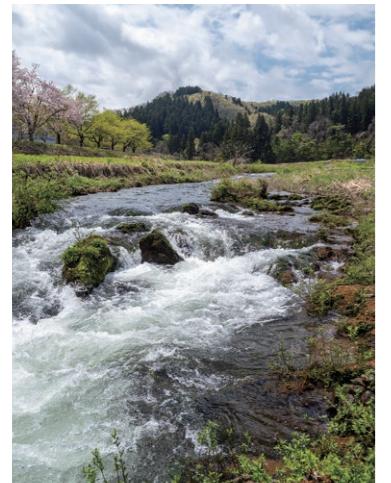
日没直後のマジックアワーのなかに横たわる加茂の中心市街地。遠くに弥彦山が見える。

歳月をかけた事業で、来年の三月に全八巻が完成する。その地道な編纂事業のアンカーの一人、加茂市教育委員会の平野黎さんについて語る。そして歴史を残す意義について、「この事業は、新しい時代のために、たびたび氾濫し市域に被害をもたらした。なかでも一九六九年(昭和四十四年)八月に起きた加茂川大水害は、死者九人をだす、かつてない大きな被害をもたらした。その翌年から十四年におよぶ河川の大改修が行われ現在に至っている。水害時より川幅は二倍に広がり、川床も二倍深くなつた。

百年の計と言われた工事の完成を契機に、町の活性化をめざす市民参加型の「越後加茂川夏祭り」が始まった。水害から五十五年が過ぎた今夏、祭りを見に行つた。なんと道路よりも低い河川敷で、民謡流しと花火大会が行われていたのである。キッキンジャーも営業し、決して足場がいいとも思えない河川敷に大勢の市民が押し寄せていた。その様子から、川と町が近しい関係にあることを実感した。水害以前は、夏になると河原のあちこちで花火をあげる市民の姿があつたという。

茂川だが、浅く狭く蛇行していたために、たびたび氾濫し市域に被害をもたらした。なかでも一九六九年(昭和四十四年)八月に起きた加茂川大水害は、死者九人をだす、かつてない大きな被害をもたらした。その翌年から十四年におよぶ河川の大改修が行われ現在に至っている。水害時より川幅は二倍に広がり、川床も二倍深くなつた。

茂川だが、浅く狭く蛇行していたために、たびたび氾濫し市域に被害をもたらした。なかでも一九六九年(昭和四十四年)八月に起きた加茂川大水害は、死者九人をだす、かつてない大きな被害をもたらした。その翌年から十四年におよぶ河川の大改修が行われ現在に至っている。水害時より川幅は二倍に広がり、川床も二倍深くなつた。



インフォメーション

椿の家

〒959-1300 加茂市宮山228番地
TEL 0256-47-0012

加茂市民俗資料館

〒959-1372 加茂市加茂229-1
TEL 0256-52-0089

加茂市教育委員会

〒959-1392 加茂市幸町2丁目3番5号
TEL 0256-52-0080

読者の声 ~前号を読んで~

身边に姫君武将がいた!

新潟に居た姫君武将の物語は、大変興味深く読ませていただきました。実際に知っている場所で起きたことは、想像もしやすく不思議な気持ちになります。あらためて訪ねてみたいくなりました。

(新潟市 50代女性)



加茂市出身の平野黎さん。市史の編纂業務と並行し民俗資料館の管理運営を担当する。



新しい加茂市史全8巻のうち7巻がすでに発行され、残り1巻の完成をもって26年かかりの編纂事業が終了する。

ぎつしり詰まる、歴史のタイムカプセルのような町だった。そして土地の歴史が未来を創ることを熟知している、賢い町でもあった。地方都市の個性が薄れつつある現代にあって、加茂市のポテンシャルは、ますます高まっていく。

加茂市では、先人たちが培つてきた知恵と努力の宝物を文献に残す新しい加茂市史の編纂事業の最終年度を迎えている。二十六年の

未来のための編纂事業